礫陵新聞

発行所
若松高校新聞部
北九州市若松区小石
発行　編集
若松高校新聞部
印刷所
吉田印刷所　㊐5424

8・9月行事
一日　登校日
二十一日　登校日
一日　出校日

漲る闘志の祭典

第18回若戸大会

梅雨もまだあけきらない七月十日、どんより曇った夏空の下で、恒例の若戸大会が、戸畑高校に於いて開催された。この大会の始まりである選手団のはつらつとした入場行進。あの赤・青・黒・白等、色とりどりのユニフォーム。そして、いかにもスポーツマンの意気を感じさせる選手宣誓。ここに於いて、第十八回の若戸大会は、選手の闘志と共に、進行された。尚、この大会の成績は、男子一位若松高校、二位戸畑高校、女子一位戸畑中央高校、二位若松高校となった。

はつらつとした入場行進

▼武道▲

剣道も柔道も、戸畑高校で行なわれた。窓側には、応援の生徒がずらっと立ち並び、中での熱戦をくい入るように見つめていた。まず、剣道の方を覗いてみると、応援していても気持がいいほど、圧勝していた。やはり、九州大会県予選優勝の貫録からだろうか、試合にもそつがなく、他校を一歩も寄せつけなかった。また、柔道は、あの「ドタンバタン。」という、畳と身体の鈍い接触和音を発していた。応援の者も、選手のかけ声と呼応して、試合の活気を増すのに一役かっていた。まさに、男生徒ならではの競技であったが、成績の方は、一年、優勝しただけで、あとはあまり振わなかった。

うずまく興奮

▼庭球▲

静かな競技であるテニスは、戸畑高校のテニスコートを使って行なわれた。一・二・三全学年共に順調に進み、決勝戦を残すのみとなった。応援者は、他の競技に比べて、多くなかったが、それでも尚、静かな中で、ただ、白球が右へ左へと往復していた。決勝戦では、一年男子、三年女子が、戸畑工業高校、青葉ケ丘高校をそれぞれ敗って、堂々優勝。あとは、決勝で惜敗して、準優勝となった。しかし、全学年が決勝戦進出という、強さとチームワークの良さは、若松高校として、自慢してもよいのではないかと思う。

▼排球▲

戸畑高校から徒歩で五分、白熱戦が展開されるバレーが戸畑中央高校であった。これこそ、応援の者と選手が一身同体になって行なわれた競技だと思う。サーブをして、ボールがネットにかかれば、観衆から、思わず深い溜息が出、また、選手がキルをする時は、「ソレ！」とかけ声がかかったりなどもした。まさに、バレーの応援は、選手の心を動揺させ、元気づけた。女子のバレーでは、サーブのミスのやりとりで、一時、観衆をドッと湧かせ、男子においては、あの巨大な体で、キルをしようとする時、驚異と感嘆の目で見つめ、そのキルが決まった時には、一緒に飛び上がって喜んでいた。結果は、一・二年の男子が優勝、一年の女子が準優勝となり、まだ、興奮がさめきらないうちに、競技終了となった。

▼籠球▲

この競技は、戸畑高校体育館内で行なわれた。応援者たちは、入口にぎっしりつまり、足の置場がないのにもかかわらず、視線をコート上に集中させていた。ひとつのボールを奪い合う選手達、そして、それを追う応援者たちの熱意に満ちたまなざし。心はひとつに解け合い、双方に通じているものは、オレンジ色のボールだけ。走る、跳ぶ、投げる等、コート狭しと活躍する選手たち。まさに、手に汗握る試合であった。そして、成績は、一年女子、三年男女、優勝。これこそ、応援と選手が一体となった成果と言えよう。

▼卓球▲

日立体育館で競技が成された。地味な存在であるこの卓球部も今年こそはと張りきっていた。緊張したせいか、試合中は実力が発揮できず、惨敗してしまった。応援の方も、あの小さな台上の白球をのがすまいと見守っていたのが……。惨敗の原因は、練習不足と試合中にあがってしまった、この二点に絞られるのではないかと思う。だから卓球部がどうだと言う訳ではない。現に、一年女子優勝、同男子準優勝という、りっぱな成績を収めたではないか。ただ、試合中のような若者らしいファイトを忘れないでほしい

二年生奮わず

▼水泳▲

午前十時、選手、応援共に、興奮がうずまき、戸畑高校プールサイドの熱気が一層高まって行く。折から、太陽が雲の間から顔を出し、紫外線を真向に浴びて、試合が旭グランドで開始された。三年、一年、二年の順で行なわれた訳だが、全学年共に敗北した。応援者たちも、グランドに引かれた四コートを何する人ぞと見つめていたようだった。一年生に於いては、この競技の経験が浅かったからだろうか、追し出しでどんどん点が追加され、見ている方が溜息のつきどおしだった。三年生は、戸畑高校に一点差で惜しくも敗れ、二年生も戸畑中央高校に十七対四で惨敗した。

▼ソフト▲

いよいよ競技が始まり水しぶきが一斉に上がると、各選手は、誰よりも五〇センチ、いや一メートル先を行こうと、必死である。

四百メートルリレーで、我が校は、まず、背泳で一位、バタで二位、平で三位となったが、最後の自由形で、一挙に挽回し、ついに一位となった。総合では、惜しくも、戸畑中央に五〇点の差で破れ、二位となった。しかし、悔いのない、りっぱな試合であった。

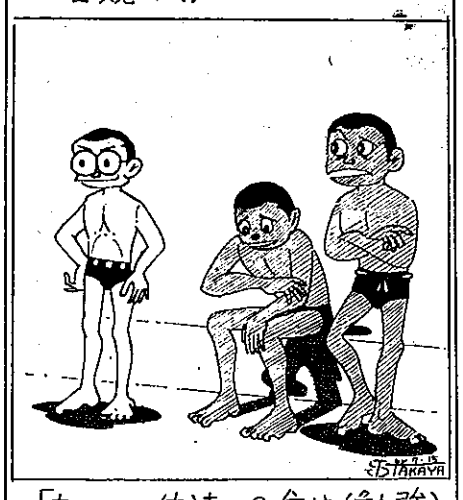
▼陸上競技▲

応援者たちの目をひいた陸上競技は、戸畑高校のグラウンドで行なわれた。各選手とも試合前の少しの時間を利用して、練習に余念がなかった。応援も他の競技に劣らぬほどの意気込みで、特に走り高飛びなどは、バーを落としても、飛び越えても悲鳴があがり、見ている方が、ハラハラするほどだった。成績の方は、三年生が、男子一位、女子二位とみごとな成績を収めたが、一・二年が全く奮わなかったせいか、総合的には、いい成績がとれなかった。

成績を見て気付いたと思うが、若高の中堅であるはずの二年が、全く活躍していない。総合成績に於いても一・三年におぶさっている恰好だ。二年生（特に女子）には、恥ずべき心がないのか！

若高戯評

◎日焼け!!



「あいつ、俺達の2倍は(勉強)やってるな？」

主張

夏休みの中の健康管理について

長期休暇を目前に控え、此の期間中における各自の健康管理上の留意点を述べて見たいと思う。

高校生である以上、小中学生と異なり。自己の健康問題については誰よりも自分自身が一番よく知っているので、自主的に注意し管理する事が大切である。特に、休みに入ると生活環境がルーズになりがちで、肉体的にも弛緩して悪習が身につきやすいので、一層注意しなければならない。尚、此の期間は海に山に、若者の身体鍛練の場として十分活用する事も結構だと思うが、鍛練についてややもすると、誤解を招く向きもあるので、留意してほしい。

更に此の期間は、特に伝染病（赤痢、腸チフス、日本脳炎等）発生期に当面するので、環境衛生に留意することは勿論、手洗い、うがいの励行等は実行しなければならない。

日本脳炎については、一応予防接種を実施しているものの、本年は特に猛威が叫ばれているので、蚊の発生源を駆除することに心掛ける必要がある。要するに、すべての健康管理の要締は、十分な栄養と補給と適度の運動によって体の抵抗力を養成し、過労を防ぐ事が健康管理上特に必要である。

夏休みこそ学生の特権

体に気をつけ

有意義な夏休みを

私はある社会人の一人から夏休みに当って次のような事を聞いた。「社会に出て一番感ずる事は、時間がないという事だ。何かをしようと思っても、仕事を覆いて帰る訳にもいかず、まとまった自由な時間など、とても社会では持てないだろう。〃自由な時間〃はやはり学生だけの特権かもしれない。学生ならば、何かやろうとしてやれない事もないと思う。夏休み、冬休みとそれだけの時間に十分恵まれているのだ。私達社会に出た者の目からは、四十日間も自由な時間が与えられるなど、羨ましくてならない。それは我々にとっては、病気でもしない限り夢物語であるからだ。

学生ならば、その特権を十分活用して欲しい。「夏休みこそ学生だけの特権だ」と、その特権を思い切り使いこなしてほしい。夏休みこそ、何かとんでもないことをしでかすのに絶好のチャンスではないか！学生時代にしかできないという大きな企てを秘めて、自分にしかできないような奇抜な計画を立ててその実行に没頭してみよう。その事に夢中になってみよう。

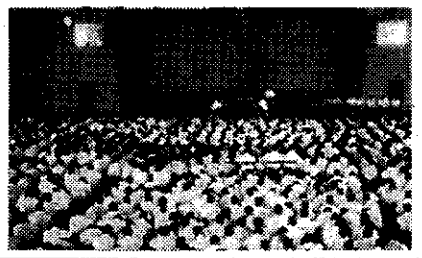
私は、昨年の夏休み、こんなことを思いながら過ごした。そして九州一周自転車旅行を実行しその後に残った日数で、小説を一本書き、今も私の部屋に腰をすえている本箱を作って休みを終えた。その一つ一つが、今でも思い出に残っている。昨年の夏休みには、悔いはない。」と夏休みに当ってのアドバイスをしてくれた。

学生にとって、夏休み程、行動範囲を広げ得る時はないと思う。したがって、この期間を有意義に過したか否かによって、学生生活に格段の差が生じる。この期間を、復習、予習、試験勉強、クラブ活動、アルバイト、旅行などに費すのは個々別々だが、少なくとも一つこれだ!!と言い得るものを持つようにしょう。

私は君達が何か目標を持ち、この四十日間の夏休みを活用することを願う。何と言っても、ただ何となく四十日間を過ごす程、馬鹿げたことはない。夏休みが終わって、新学期の一時を友と共に夏休みの成果を語り合うのもよいものだ。その時に友に語り得る夏休みを持たない人はみじめである。〃諸君、四十日間を有意義に！〃

成功か否か!!

―議題のない生徒大会―



生徒大会―それが生徒会最高の議決機関であるとすると、七月十一日に行なわれた生徒大会は、当に迎破りであった。それは、一般生徒と生徒会役員・委員との間に交された緊急質問と答弁にすぎなかったからである。いや、だから失敗であったとは断言できない。ある意味に於いては、成功したと言えるかもしれない。前回の騒然とした雰囲気ではなく、大部分の生徒に〃聞こう〃という態度が表われていたことに於いても、少なくとも前回の生徒大会に比較し、かなりの進歩があった。もっとも、常識からいうと、これは当り前の話なのだが…。

開会の辞の後、議長団紹介、校長先生の話、顧問の先生紹介と、ここまでは例年どおりであった。次に各種専門委員による協議結果の報告が体育委員、風紀委員、美化委員の順に行なわれた。早くも会場の至る処で私語が始まる。一時、議長の一声により静かになった会場も、最後の美化委員の報告に及び、雑談の声が絶頂に達した。まるで幼稚園である。その中で運営委員長の葉石君が、先にH・R代議員会で討議された長髪、ナップサック、バス等の問題に関する議題が、最終的には代議員会に於いて、全部否決された事と、その賛否両論を明かにした。その事について、第一号の質問者が、議案の取り上げ方の疑問点を述べた。ここで会場の雰囲気が一変した。代議員からH・Rで討議した議題が否決されたと聞いた時、殆どの人が持った不信感がこの場で爆発したようであった。その他「代議委員の伝達が悪い為、代議委員会で話した事と、H・Rでの討議の内容が食い違っている。」「委員会の際、代議員の主調が入っていたのではないか。」等と代議委員会における不手際が指摘された。又、「否決されたから全面的に話し合わないと言うのはおかしいではないか。」等の質問に、執行部側の答弁として、「否決された問題については決して放棄した訳ではない。代議員会での話し会いが食い違っていたのは確かであるが、否決された以上、何もできない。が、今後、要望があれば、話し合います。」運営委員からは「そのような不満は、もっと前の段階で言って欲しかった。」と述べられた。やがて質議は、執行部、各種専門委員会へと移った。ここでは、生徒会費の内訳、予算についての質問、風紀委員に対しては盗難に関する質問が出された。この様に議事が進行している間の生徒の態度はどうであったろう。拍手、野次と、宛ら、国会といったところである。心から賛成の拍手を送った人も少なくなかっただろうが、どう見てもそう解釈できない人がいたのは、実に恥ずべきことだ。

今回の生徒大会における質疑の主流となったのは、生徒大会の運営、しいては執行部、運営委員会、代議員会に対する痛烈な批判であった。今迄、校内の片角に燻っていた。それ等が、生徒大会という場で、真向からぶっけられたことによって、生徒会と一般生徒の間が、一歩狭ったと言えるのではないだろうか。しかし、それは一歩に過ぎない。溝はまだまだ深く広い、それを除くのは、執行部だけの役目ではないはずだ。我々、すなわち生徒会の一員であることさえ忘れている一般生徒にも課せられるべき問題なのである。最終段階で批判する事は簡単である。しかし、それはあまりに無責任ではないか。もっと生徒会を知り、活用し、一般生徒の声を繁栄させようではないか。

高まる関心

討論会

◇去る七月十一日に生徒大会が行なわれた。一年生にとっては、高校に入ってから初めての◇生徒大会であった。今年は、議題が全部否決されるという、例年にない状態になった。そ◇こで生徒会執行部は、今までの話し合いの結果を報告するだけにとどまった。それについ◇て、多くの批判があったようだ。そこで、生徒大会の翌日の七月十日に、新聞部の主催に◇よって会議室で各クラスの代表による、討論会が行なわれた。初めは、あまり活発な意見◇は出なかった。しかし、議事が進むにつれて、話し合いに熱が入って来た。やはり、この◇会においても生徒大会や執行部に対しての意見が、活発に取り交された。◇

司会「昨日、生徒大会が開かれましたが、それに対して皆さんの関心度及び、その内容を聞いてみたいと思います。」

一年「生徒と生徒会とが、かけはなれているので、生徒会の方は常に生徒を引っぱって行かなければ、みんなの関心は高まらないのではないかと思います」

三年「私はハッキリ言って関心がありませんでした。そもそも議題のない生徒大会を開いたと言うこと事態が間違っていたのでは……。」

三年「始めは関心がなかった人でも、途中で意見が活発に発表されるようになったので、関心を持って聞くようになった人がふえたのではないかと思います。」

一年「生徒大会が始まる前までは関心があったのですが、途中から執行部と発言者だけの対話の状態となり、一般生徒を無視した状態になったので関心がなくなってきました。」

一年「イスを出してないために話し手の顔が見えず、話し合いの内容が理解できませんでした。その事もみんなの関心をうすめた理由の一つだと思います……。」

二年「議題に長髪問題などの身近な問題があり、大いに関心があったのですが、単に、否決された問題の結果報告と聞いて全く関心がなくなりました。」

司会「それでは次に皆さんは生徒大会の目的又、意義は何だと思いますか?。そしてそれは昨日、果たされたと思いますか」

二年「生徒大会の意義とは、一般生徒と生徒会が話し合うことだと思います。その点では昨日の生徒大会は途中からでも意見が活発に出て来たという点で、目的が果たされたのではないかな一。」

二年「生徒大会は、生徒のため開かれるのに、一般生徒には話し合いの内容がよくわからなかったと思います。まず生徒と生徒会が一体にならなければ……。」

三年「生徒会が一般生徒に直接問題を投げかけなければだめだと思います。」

一年「本当の意義というものを知っている人は、おそらくほとんどいないのではないでしょうか。」

司会「では、一応執行部の方に聞いてみましょう。」

会長「執行部の考えとしては、生徒大会の意義というよりも、まずは生徒の関心を生徒会に向ける事の方が先決問題だったんです。それでその対策としてまず第一に、全校生徒から議題を提出してもらった訳です。そして代議委員会を通して生徒大会に出すかどうか話し合った結果、多数決で全部否決という形になってしまったんです。」

二年「いくら代議委員会で否決されたからと言っても議題のない生徒大会などないと思います。その中からでも議題を見つけるべきでは……。」

会長「しかし一度代議委員会で否決されたものをまた議題にするということは、代議委員会を無視したことになるんじゃないかな一。」

二年「でも、マフラーの件などは男子クラスでは話し合わないまま決を、とってしまったと思いますか。」

司会「では最後に今回の生徒大会は成功したといえますか?」

三年「少なからずも生徒が関心を持っていたと言うことは成功だと思います。」

大会の意義を語る執行部

大会の意義は？

各委員会と連絡を！

現在の生徒会には、機関と機関、会員、職員会その他のつながりが、あまりないように思える。これは、一体どういうわけか。

理由にも色々あろう。執行部の空回り、委員会の活動不振と連絡の不徹底、その他会員についても理由があるように思える。そしてこれらをまとめてみると最大の理由は「連絡の不徹底」ということになる。たとえば代議員会での出席者数を見ると、あまり、いや全くなっていない。半数くらいしか出席しないこともある。そうすると議決はもちろん、連絡も、欠席している代議員のクラスからはその意見がでない。たとえ議決できたとしても、その結果をクラスにもって帰って発表することができない。いや、これは代議員会だけのことではなく、他の各専門委員会でも同じような現状である。H・R委員会も中々人数がそろわずいつも定時に開会できない。連絡が徹底していないために、現在の生徒会はまともに活動できない。

たとえクラスでどんなにすばらしい意見がでても、そのクラスの代議員が会に出席しなければ、何にもならない。またある委員会でどんなにすばらしい決議をしても実行が独走になれば失敗は目に見てえる。もし連絡が徹底したならば、そのようなことは起こらないと思う。たとえ起こってもすぐ修正できる。いやそれだけではなく、連絡の徹底によって、少しでも活発な生徒会活動が現在の「無気力」という悪魔におかされた生徒会の立ち直りを促していくであろう。連絡の徹底を！

剣道・ハンド　県大会一位　次は九州大会

剣道部

九州大会県予選
日時　六月二十三日十時
場所　嘉穂高校
決勝リーグ
若松2－2嘉穂（定）（引き分け）
若松2－2浮羽工（本数勝ち）
決勝
若松3－2柳川商
先鋒　中野　一メメ古賀
四　田中コメーコ　石橋
中　笠井　一メ　古賀
副　長坂メメーメ　吉田
大　野口ドドーメ　内田

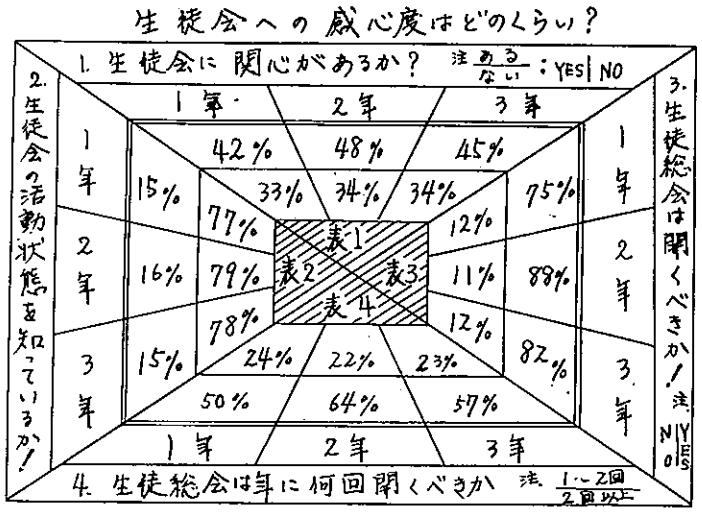
個人戦
準々決勝
野口（若松）メドー浦野（南筑）
準決勝
野口（若松）ドドー八尋（嘉穂）
決勝
野口（若松）メコーコ　内田（柳川商）

予選リーグは簡単に勝ち、決勝戦は全国大会県予選優勝の柳川商業であった。大勢の観衆の中で決勝戦が始まった。試合は接戦で、田中選手、長坂選手が勝ち、2対2で若松野口選手、柳川商内田選手の大将同士の戦となった。内田選手がメンを先取すればすかさず野口選手がドーを取り返し、まさに手に汗握る戦いであった。翌月選手の「闘魂」という声が道場内に広がった。その少し後、上段に構える内田選手に、野口選手の逆胴が見事に決った。その瞬間、選手応援の人達は立ち上がり、手に手を取り、涙を流し、抱き合って喜んだ。この感激を忘れず、九州大会も頑張ってほしいと思う。

ハンドボール部

インターハイ（全日本）九州大会予選が去る六月十五～十六日と二十三日間開催された。第一回、第二回戦とスムーズに勝ち進み、準決勝戦に至った。相手校はシード校香椎高校であった。取りつ取られつの白熱戦になり、賀地君の活躍が目立った。しかし惜しくも、十三対十二と一点差で敗れた。これは結果のみであり、実力は互角と見えた。ではハンドボール部の九州大会出場を祝って終わりとする。

生徒会への感心度はどのくらい？



先日、生徒会の感心度を調べるべきアンケートをとった。一年二クラス、二年二クラス、三年一クラスに行なった結果、次の通りになった。

× ×

表1では「生徒会に関心があるかどうか。」各学年通じて大体半数の者が生徒会に感心があるということがわかる。

× ×

表2においては、生徒会の活動状況を約一五パーセントの者しか知らないと推定できる。それだけ今の生徒会のと密接さが欠けているともいえる。

× ×

表3については、約八割の生徒が生徒総会を開いて欲しいと見られる。

× ×

表4においては、生徒が年に2回以上開いてもらいたい考えが伺われる。

全校生徒にアンケートできなかったことを深くおわびします。

編集後記

一学期も今日で終わり、新聞部でも、今学期二度目の新聞を発行する時期になりました。今号は御覧になってお気付きでしょうが、都合により二面になりました。これは、我々新聞部員が考査などのために、活動困難となったのが、主な理由です。しかし、問題は枚数ではなく、内容です。どうか裏表じっくり読んで下さい。それから、今号のトップは、先日行なわれた若戸大会の事を取り上げました。今年も例年どおり、男子一位女子二位という好成績を修めました。それから、生徒会のアンケートを取ったり、生徒大会の事についても取り上げました。今回の生徒大会は、議案が全部否決されるという異例な状態の中で行なわれました。その翌日、新聞部主催の各クラスの代表者と、生徒会役員による討論会が開かれました。この会では大変手きびしい意見も出て活発な話し合いになりました。生徒会役員もこの生徒大会を通じて、生徒の皆さんに、生徒会への関心を高めてもらおうと努力しています。この新聞を読んで少しでも生徒会に関心を持っていただければ幸いです。

夏休みもいよいよ明日から、一年生は、キャンプの語闘が絶えず、二年生は、二学期の修学旅行に胸をふくらませ、三年生は、受験勉強にと、それぞれ多忙なことだと思いますが、体だけは気をつけて、有意義な夏休みをお過ごし下さい。

先生宅訪問

先生は百点満点？

社会科担当　内田先生の巻

去る七月七日、我々新聞部五人は、八幡の尾倉町から十分程坂を登ったところにある内田先生のお宅を訪問した。先生と奥様が、私たちをにこやかに迎えて下さった。さっそく質問しようとすると、

「まあ、そんなにあわてないで。」と言われ、一同微笑んだ。落ち着いたところで、短刀直入に質問をはじめた。

―御出身地、御出身学校は―

八幡区（現住所）出身で、福岡筑松小学校→中央中学校→八幡高校→同志社―教師になられた動機は―

教師が好きだったし、歴史も好きだったので、はっきりと言われた。

―教師になられて一番印象に残っていることは―

一番最初に、卒業させたクラスが何んといっても忘れられない。

―学生時代の思い出は―

大学に入って帽子をかぶった時だったなあ。

―御趣味は―

読書で、歴史物が一番多かった。それに、学生時代には、一日一～二冊読んだ。

―モットーとされていることは―

今の所、修業中で、四〇代になったら自分のしっかりとした考えをうち出す。今は何でも読む。

―好きな言葉は―

雍石埋草となりたいと心がけている。（少しでも何かに役立ちたいが、大物になるつもりはない。いわば、縁の下の力もちになりたい。）

―尊敬する人は―

福沢諭吉―時の流れを、常識的に考え。現在では信念のある人。

―若高生をどう思われますか―

個人的には、みんなよいが、集団になった時悪い。また、盛難が多く、公共心がなくなってきている。

―好きなテレビ番組は―

文吾捕物帳、ふるさとの歌まつり、現代の映像、生活の知恵等。

―グループサウンズについては―

興味がない。（ずばりと）しかし、コマーシャル（チョコレート）の歌はかわいいネ。

―男性のロングヘアーは―

似合わない、時代的な錯覚を感じる。（中世のヨーロッパを思い出すと笑いながら）

―奥様から御覧になった先生は―

奥様は、笑いながら先生に助けを求められていましたが、先生は笑ってばかり、何点ぐらいですかと聞くと、奥様は、又先生の方を見られ少し考えているみたいでした。私達が、見るところでは、点がつけられないほどよいのではと感じられました。

―これから先先生に望む事は―

帰りが遅い（七時過ぎ）事だけで、他にはいうことがない。

―先生のくせは何ですか―

別にないようですけど…。

―初恋はいくつですか―

小学校の頃と、照れながら言われた。

楽しくしゃべっているうちに、時間がまたたくまに過ぎたので、私達は、これくらいでおいとまることにした。

仲の良い所をパチリ